

Title	ボランティア・アソシエーションの場と機能
Sub Title	The place and functions of voluntary association
Author	Henderson, Charles R.(Arai, Tomohiro) 新井, 智浩
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.59 (2004. ) ,p.83- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000059-0083">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000059-0083</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ボランティア・アソシエーションの場と機能<sup>1</sup>

## The Place and Functions of Voluntary Associations

C. R. ヘンダソン

*Charles R. Henderson*

新井智浩\* 訳

*Tomohiro Arai*

### 【目次】

- ・ 導入：具体的組織の提示
- ・ 定義
- ・ 類型化の原理
- ・ 合衆国における趨勢
- ・ 四つの一般的用法；局地的・一時的なニーズ、批判、実験法、補助的行為
- ・ 悪習—権利の濫用について
- ・ 展望

かつてトックヴィル (Tocqueville) は、これまでまったく気づかれずにいた社会的慣行について以下のように記述した。

「私の意見では、アメリカにおける理知的、かつ道徳的なアソシエーションほど考慮に値するものはないのではないかと考える。この国における政治的、そして産業的なアソシエーションは、確かに私たちに強い印象を与えてきた。しかし、それ以外のアソシエーションのあり方は、私たちの観察する目線の先からは巧みに逃れてしまうか、仮にわれわれがそうしたものを見出し得たとしても、完全には理解することができないだろう。というのも、私たちは今までそのようなアソシエーションを何一つ持ち得なかったからである。しかしながら、そうしたアソシエーションはアメリカ人たちにとって必要不可欠な

---

本稿は C. R. Henderson, *The Place and Functions of Voluntary Associations*, *American Journal of Sociology*, Vol. I, No. 1, 1895, pp. 327-334 の翻訳である。

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（臨床社会学，ケア論，社会調査論）

<sup>1</sup> ボランティア・アソシエーションの位相と価値については、Schäffle によって認識されている。*Bau und Leben*, Bnd. I, S. 740, ff. を参照のこと。

de Tocqueville, A., *Democracy in America*, Vol. I, p. 204 and Vol. II, p. 118, 4<sup>th</sup> Amer. ed., 1841 (=1972 阿部 齊訳『アメリカの民主政治—その伝統と現実』東京大学出版会；=1972 井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治』講談社学術文庫)

Bryce, *American Commonwealth*, Vol. II, p. 239, McMillan & CO., 1889. (=1944, 名原広三郎訳『アメリカ国家論』橘書店；=1953 河口真一・石丸重治共訳『アメリカン・コモンウェルス』南雲堂)

べきものであるし、おそらくはこれからもそうだとすることを考えなければならない。』

「アソシエーションに関する科学的考察は、民主主義の国々における科学的営為にとっての源泉である。というも、あらゆる進歩は科学的営為によって生み出された進歩に依拠するのである。」

「他のいかなるものと比較しても、人間社会を導く法律ではより精密、かつ明晰と考えられるものが存在する。仮に人類が文明の只中にあり続ける、あるいは文明化を志向するのだとすれば、ともに手を携え合うための技法 (the art) は、地位の平等が増加するのと同じ程度に発展し、進歩するに違いないであろう。」\*

この論文は、人間の究極の目的に向かおうとする自由な協同のあり方のさまざまな形態について記述し、見解を出し、批判を表明するためのこの論集にとって、概略のひとつとなるものである。援助を懇請し、資金を必要とする多種多様の組織体を目の前にして、理論家と実践者の両方が手をこまねいている状況が現実としてある。

社会改良を試み、充足を目指そうとする多種多様の主体 (agencies) を、簡潔ながらも、十分に内容あるものとして考えることは、こうして思想家や慈善事業家に対して時間と資金を要求するような、矛盾を抱え、騒々しさにあふれた社会を整然と調整する (fix the rank) にあたり手助けとなると信じるものである。

#### 導入：現実的組織の提示<sup>1)</sup>

アメリカにおいては、ボランティア・アソシエーションの組成についての法的制限はない。むしろ、われわれの国の法律はそうした団体の多元性を是認し、その具体化を促すほどである。長期にわたる公衆 (public) の非難に対する唯一の防御は、公開性 (publicity) と批評しかないということだ。

家族は、この論文で用いられる語義としてはボランティア・アソシエーションとは言えない。人間はそれぞれに生を受けると同時に、選択の余地なく家庭という集まりの成員となる。そして、子供たちが物心つく年齢には、家族がすでに自分に影響を与えていると認識するにいたる。確かに家族という集まりの機軸となる婚姻関係は、比較的自由的な意思によって導かれる関係である。しかし、その様態はまず自然条件としての第一次的欲求と性という事実によって決定される。加えて、社会によって遵守を求められるような、慣習と法、つまり共通の福利 (welfare) についての条件を重んじる社会的信条を反映したものである。ことによって決定されるものだといえる。

産業組織は、その大部分が自然的条件、一般的慣習、立法によって決定され、時勢の要求や社会改良家による方策をもってしても、きわめてゆっくりとしか変化しない。個人は自由に契約上の提携関係を結ぶことができるし、法人に対しては株券を購入することで、その活動に関わることは可能である。しかし、いちど合意へとこぎついてしまえば、契約にまつわる個人の動的効果の範囲は法によって非常に厳密に枠づけられる。

教会が厳格で保守的な制度であるということは周知のとおりである。信徒のうちで熱心なものは、教会が不変の存在であるということに頑ななまでに誇りとしており、一方で懐疑的な人々は教会を前世紀までの遺物であるかのように決めつける。ある意味では「輝かしき中庸」 (golden middle) ということが真実となる世界だといえる。時間的にも場所的にも大きな広がりを持ち、かつ永きにわたり存続するような、あらゆるかたちの他の団体もまたそうであろう。教会は勢力を拡大する。言うなれば、霜にも早

\* 西山志保氏 (日本学術振興会特別研究員) には訳出に当たって、協力いただいた。ここに感謝の意を表します。

魑にも抗し、嵐の中を踏みとどまろうとして、深く根を張るのだ。教会は、進歩的な思想家たちの小集団が束になってかかっていたにせよ、難なく作り直されるような組織体ではないのである。

国家は、契約や因習によって形成されるような自発的な組織であるとは言えない。国家はそのひとつの発展型である。そしてあらゆる時代を超えて縦糸と横糸とを結び合わせることに貢献してきた。すべての市民は、権利と義務の及ぶところで生を受ける。すなわち、順応と適応の厳粛な過程によることなしに国民としての生活を譲り受けるのである。

### ボランティア・アソシエーションの定義

この論文では、ボランティア・アソシエーション (voluntary association) という語を、成員が互いに構成員として認め合うことを意識的に選択できるような、社会的な協同のあり方を示すのに用いる。確かに、もっとも自由な状態にある組織体でさえ、あらゆるすべてのものが一定の物理的条件に影響され、所与のコミュニティにおける慣習や法によって設立されるのは事実である。しかしボランティア・アソシエーションにおいて、それ自体を決定する要件は顕著かつ特有のものである。このような社会的組織体は、家族、教会、国家のようによく知られるような制度体と比較すると、永続性や厳密さをもたない、流動的で不安定な状態だと言える。

ボランティア・アソシエーションは、多種多様の究極的な目的に従事するべく生み出される。それは、ある特別の目的 (object) を達成するために、あるいは既成の組織の働きを変え、導くために組織されることになるはずである。そうしたボランティア・アソシエーションは、浅瀬ではなく、より深い海域にある大型船と港湾とを往復する舢舨に喩えることができるだろう。もしくは、あたかも本隊を前進せしめる斥候の一連を思わせるものがある。

### 類型化の原理

クラブ、社団、同業者団体、協会、組合、会社、協議会、親睦団体、信徒会、都市部に建てられた集会所、新聞の社会面など、こうしたものに腰を据えじっくりと考察するとなれば確かに途方にくれるよりはかかない。そうしたものごとを理解するためには、ここで分類をし、判断する規準となる何らかの合理的原理を見出さなくてはならない。

分類に関するひとつの方法として、何が人の幸福を促すのかを基点として考えてみたい。そこでアソシエーションのあり方を、博愛的なもの (philanthropic)、互恵的なもの (mutual benefit)、公共的なもの (public) という三つに分類しよう。ここで思い起こされるものが、同輩 (peers) に払う敬意、同情 (pity) の対象、優越者 (superiors) への尊敬というゲーテによる三つの敬意 (Three Reverences) の寓話である。これは私たちに示唆を与える。そう考えれば、この区分法が、さまざまな形態で違ったものと分類されてきた下位集団やアソシエーションの種類についての境界線を確定させるうえで、よりよいものとなるはずだからである。

家族、経済団体、教育団体、政治団体、宗教団体と連携し合う結社 (society) は、密接に関係する団体 (body) の制度 (institutions) に従った特有の性質を持つ。しかし、それらの分類に関するいかなる方法論も、社会的関係の複雑さを記述することについては不足をきたすはずである。私が先に示した分類法は、異なる項目に属する同一の現象を取り扱うには都合が良い。というのも、この方法によるならば相補的で複雑な関係性が、より適切な形で目に見えるものとなってくるからである。

判断の規準は、分類に関する原理と一対のものとして考えられなくてはならない。だいいち、アソシエーションが持つ意図を研究するということは、至極当然なことだとは言えまいか。ここでの決定的な要因として、創造的説得と価値基準が考えられる。一般的には、団体の意図は設立趣旨において言明され公表される。しかし、実際の究極的な目的は有機的に編纂された規約が暗示するものよりもずっと複雑なものであるかもしれないし、それらは設立趣旨において公表された要件と対応するとは限らない。たとえば、初期の労働組合 (trade union) のいくつかは親睦と相互扶助という掛け声の下で組織されたのである。というのも労働組合の存在が許容されるには、法的規制と大衆感情の面から考えてそれもやむをえないことだったのだ。ある高級社交クラブの会員規約は、文学や芸術を引き合いに出しつつ魅力的なものに仕上がっている。しかし、そのクラブの会員規約について非常に面白く解説ができるのは、じつのところクラブにいる調理師や給仕なのかもしれない。社会の決定的要因は、言葉のうへの知識とされたものと同等に行動に求められるものであろう。

#### 合衆国における趨勢

次に必要となってくるのは、このようにして見出されてきた集団の目的の価値である。そこではどのような満足があるのか。目標の現実的側面が社会全体にどのように影響を与えるのか。どのような範囲の人が、そこから支援を受けるのだろうか。たとえば、学生の親睦団体などは構成員の特性が大きくかわってくるだろうし、財務的要因が注意を払われる対象となるところでは、幹部役員の実務能力や将来にわたる才能や忠誠などが考慮すべき材料となる。統計の科学と技法は、われわれが考えようとしているさまざまなアソシエーション形態についての地理学上の分布、変動や傾向、成功や失敗とある種の結びつきを示すことで価値ある貢献ができるだろう。わが国の数多くの慈善団体 (benevolent society) は、この種の調査を必要としているし、何百万もの人々の利益が調査の報告に影響されるのである。

#### 四つの一般的用法

##### (i) 局地的・一時的なニーズ

ここで社会組織のこうした形態について、一般的な効用を考えることにしよう。まず手始めに社会の一時的な欲求の実現、もしくは局所的な集団とか限定された階層のニーズについて言及することとしよう。社会分化は選好の変化に影響されるといえる。そう考えれば、私たちがより高次の文明を志向することができるのは、各々の素質や性向の違いを伸ばしていくことにあるということがここでわかるはずだ。ここで同質性を重んじるとすれば、混迷の度を深めるに過ぎない。俚約を課す厳法 (blue laws)<sup>2)</sup> は決してこうした「違い」を抑えつけることはできなかった。その経験が近代人に対して教訓として遺したものは次のようなことであろう。大多数の人に共通な福利に関して反目し合うようなことがある場合には、ただコミュニティのさまざまな集団の欲求充足の方法を安全にあるいは適正に統制するということである。連邦政府の重苦しい仕組がなしたものとえば、せいぜい女性の帽子 (bonnet) のスタイルや野球のルール、乗り物の車輪の数を規制することくらいで、あまりに不要といえるものであった。永続的かつ普遍性を持つニーズは、おそらく自治体や州政府が満たすものだといえるかもしれない。たしかに、限定されたサークルでは、ダンテの批評が最良のものを残しているといえる。しかしわれわれの合衆国の、ブローニング銃と聖書への厳格とまでいえる帰依によって打ち立てられた集落では、そうした旧大陸の批評はほとんど意味をなさない。実際、聖職者機関でさえそうしたデリケートな問題に関し

てほとんど踏み込めないでいる。軍司令部はごくありふれた豆料理程度のものを供することができるだけだった。しかし、民間企業であればもっときめ細かい食事を提供できるはずなのだ。たとえば南北戦争の際、外科医の正規部隊がキリスト教徒団体を不可欠な援助として歓迎したではないか。

## (ii) 社会批判

ボランティア・アソシエーションについてのもうひとつの一般的効用を示したい。それは既成の慣習や制度についての批判を発展させることにある。すべてのメンバーが歩調を揃えて前進するということなどありえないだろう。いうなれば山々の高嶺は、夜明けの光にあふれる一方で、谷間は夜の闇によって未だ暗いままなのである。またいうなれば、コロンブスが大西洋の横断を容易にしたといえようが、内陸部への前進は容易ならざることだった。かつて、奴隷廃止論者たちはより良い社会を導く理想としての高次の法 (higher law) の論理を練り上げた。そして彼らは高次の法の観点から、奴隷制を容認する憲法と司法の決定を非難した。彼らは真理を伴った事実を示すことによって、多数派を追い詰めたのだ。新しく未熟なコミュニティでも、徐々にではあるが、婦人会が中心となって、洗練された文化についての初歩的な課題を学び、教えようとしている。仮に彼女たちが、粗野な民衆が多数を占める町議会と、多数の教育のない人々からなる教育委員会 (boards of education) の下で決定を待ち続けるなら、西部の町々はあと百年ほど粗野なままであったろう。こうした事例を見ていると、あらゆることが張りを失いつつあるのだと感じる。ただ靈感に導かれた指導者たちが預言めいた発見をし、啓示する。それは各世代の人々を新しい旅のために身構えさせ、気を引き締めさせるであろう。イエス・キリストにまつわる新約聖書のお話をひきつつ言うならば、殉教者たちの十字架に使われる材木は、この合衆国のどこの郡区にも存在しない。だから、開拓者の一団のなかで先陣を切っていく者と一致団結することによって、気持ちを束ね、腰の引けるような試みを活気に満ちたものとしたことに感謝しなければならないだろう。もし、私たちの独善に割って入り、反省へと向かわせることがなかったらと考えてみよう。つまり自ら進んで目を光らせる人々がアソシエーションを形成するということがなければ、教会や国家は腐敗し、良き慣習でさえこの世界を壊す事になるであろう。旧約聖書の列王記における勇敢なるエリヤ (Elijah) の故事にあるように、殉教者や預言者でさえおぼろげに気の迷いを持ったり、孤独を背負って倒れていくのだ。そして、エリヤがエリシャを伴ったように、二人でいることは一人でいるよりもずっと勇気を持つことができるのだし、市民連盟 (Civic Federation) の委員会にいる人々は利権政治家よりも強いのだとさえ感じるであろう。そしてなにより預言者は、アソシエーションによる抑制を必要とするという意味で、別の弱さを持つものである。改革者の大半は忠告という抑制と均衡とを必要としている。それは、楽天的な空気のなかで私達が新天地を目指してきた問いかけが、物事を「どのようにしてやっのけるのか」ではなく、「どのような物事をすればよいのか」であるということをともしれば忘れてしまいがちとなるということなのである。社会の医者と自称する人たちは、身体への触診にもとづき手術を施すよりも、時として遺体や猫を相手とした解剖の研究に急ぎ立てられているのではないだろうか。強力な改革への熱意を持つ人々は、1,600万人の人々を巻き込む立法を求める前に、少なくとも10社の企業が合意するに至ったことについて議論を交わすべきであったのではないか<sup>3)</sup>。議論ある社会には、未熟な社会計画を押しとどめるためのよきフィールドを持つ。そして、それは議論ある社会にある一般的機能なのである。

## (iii) 社会実験

議論の次にくるのは社会実験である。私たちがマラリアの蔓延する海岸に資本と移民とを送り込む前

に、冒険心あふれるスタンリーを暗黒の大陸へと踏査に赴かせることは賢明なことなのである。政府は農民のために多くの実験場を設立する一方で、農民団体の側でも自分たちの力で新たな方法を試している。もし、数人の人間が苦しんだというだけでその試みが失敗したとしても、彼らが成功したとき、世界はより賢明なものとなるだろう。困民救済は局所的な慈善団体によって担われ、さまざまな方法が模索されるなかで、徐々に地方的に、さらに全国的な方法が見出されるであろう。ドイツにおける労働者の移住地は、寛大な人々による小集団の努力によって発展してきたが、一方でその有用性と限界とが明らかとされてきた。しかし今日では、その種の社会実験は徐々に政治権力による補助と統制を受けることになるのは確かであろう。こうしたことを見てくると、援助のための民間の資源は非常に大きなものとなってきており、あっさり政治権力に手渡すにはあまりにも惜しいとさえ思われる。ボランティア・アソシエーションは、哲学や科学的調査の研究対象として最適の形態を備えた社会組織であろう。というのも、長い歴史を持つあらゆる団体が、本来備えている妨害的かつ曖昧模糊とした傾向から自由であると考えられるからである。実際、政党と宗教団体の利害関心、そして当局職員の先入観がボランティア・アソシエーションの周辺で無駄に燃え盛っているのではないか。

#### (iv) 補助的行為

国家なり教会なりの個性に乏しい、画一的方法論が失敗に帰したところで、ボランティア・アソシエーションはより多く対面的サービスを提供しうらうだろう。たとえば、困民救済に関するエルバーフェルトシステム (Elberfeld system)<sup>4)</sup> がその好例であろう。この制度は政界や宗教界を代表する人たち、つまり執務官や牧師の尽力により立ち上げられた。地方自治体当局が十分な資金を提供し財務を管理して、慈善団体よりもはるかに上首尾に浮浪者を統制することができたのである。

しかし、病人を訪問して友愛関係をもって彼らを励ましたり、貧困状況に関して個別相談を受け付けるなかで、政策上の判断から無分別で不本意な財の分配がなされていることが現実になってくる。そこで明らかとなったのは、行政の組織はあまりにきめが粗く鈍重なものではないかということであった。役人は行政組織の欠陥を認め制度を補助するものとして、感謝の念と名誉のために働く友愛的な訪問者達を招請した。エルバーフェルトシステムはコミュニティの救済システムとしてよくできたものではあるのだが、実情としては、民間人のリーダーシップの下にある多くの慈善活動がまだ入り込む余地を残している。

クリスチャン・エンデヴァー協会やキリスト教市民連盟、YMCA など程度の差はあれ、教会と密接な関連を持つボランティア・アソシエーションは多い。こうした団体の存在は、教会に対する非難やその失敗を証明するものであると考えられている。そうした批判は軽率に受け入れられるべきではない。それどころか、こうした機構が示唆するものとは次のようなものである。つまり、教会の相当数の信徒は、問題解決にふさわしくない複雑な手続きが存在する教会を社会改良の方法論に結びつけ始めている。4~500万人もの団体のメンバーすべてが、ある意味で局所的、かつ一時的な目的のために、大規模で費用のかかる行政施設に間借りすることはたしかに理解しがたい話ではある。しかしながら、それは教会に間借りすることを考えればまだ価値があるともいえる。ボランティア・アソシエーションは、こうした状況において最も待ち望まれている結社の形態であることは確かである。

多くの社会的機能を国家独占の方向へと向わせる非常に強い風潮がある。また他方ではそうした政治的機関の拡張に反対する風潮もある。こうした二つの傾向は互いには抑制し合うものではなく、むしろ相補関係にある。都市当局なり州当局が、ある社会的機能を引き受けるようなときさえ、警戒心の強

い市民は法律の執行を監視すべく結集することであろう。いかなる支持を受けた政府でさえ噴出する動議をいまだ解決してはいない。公務員が市民の保護のために計上された歳費を扱う際に、大衆を導き、腐敗を明らかとし、方策を調査するための政党や団体をもたないところでは、実行力と実効性を備え、なおかつ潔白な政府を有することは決してできない。

以上のことから、ボランタリー・アソシエーションは厚かましく、胡散臭いものとする向きもあるかもしれない。こうした批判は逆に、ボランタリー・アソシエーションを構成する人々が隣人たちよりもより敬虔で、知的で、愛国者であることを意味しているのではないだろうか。その危惧は現実のものであり、また危険なものであるに違いない。しかし多くの人たちは嫉妬することなく、生命と財産の安全をより確実にし、税負担の軽い社会を建設しようとする人物によるものであれば、いかなる利益をも受け容れるだろう。

### 悪習—権利の濫用について

そうした結社は社会的活力を浪費し、家庭と敵対し、教会の資源を搾取し、イナゴの異常発生のごとく広がると言われる。そうした反対意見が、事実ある部分で正当化されるのは確かなのだ。そこで想定されているものは、あまりに多くの結社が存在し、とりわけ悪質な結社が結構あるではないかということだろう。そうした結社は互いに似通っており、繰り返し現れては邪魔し合っている。そのいくつかは、ただ単に委員会の重役の善行を単に宣伝するために、あるいは秘書に給与を支払うために組織されたようなものである。実業家はどのような結社が彼の天賦の才と引き合うのか、あるいはどの結社が災いを引き出すのかを知ろうとして、苛立ち、ある種複雑な気分を覚えさせられるのだろう。

### 展 望

ボランタリー・アソシエーションの濫用に対する最も厳しい判断は、日々の心の感動を忘れることに対して向けられる。そこでは、耐えざる批判と調整とを必要とされる。ボランタリー・アソシエーションは、人間の純真さと有益な満足、進歩の先駆者、研究と文化の主体 (agencies) の保護などを不可欠な手段とする最良の財産である。

### 【訳注】

- 1) この翻訳では、井伊玄太郎、1987、『アメリカの民主政治』（講談社学術文庫）を参考とした。
- 2) 原文では小節に分けていないが、便宜的にここでは節に分けることにした。節のタイトルは文頭にある目次をそのまま用いている。
- 3) 日曜の飲酒、仕事、営業、ダンスを禁じた。たとえば1920年代後半の禁酒法は典型例と考えてよい。
- 4) おそらくこの文章では、南北戦争後、北部（東部）を中心とした産業資本主義の発達と、それに伴う企業合同と寡占市場の問題を背景としていられる。当該論文が刊行された1895年当時は「トラストの時代」といわれ、大企業による市場の寡占が問題とされた。5年前にあたる1890年には連邦議会がシャーマン法（反トラスト法）を制定している。しかし、東部の有力州はトラスト容認の政策をとったため、実質シャーマン法は骨抜きにされていたといわれる。
- 5) エルパーフェルトシステムとは1852年にドイツのエルパーフェルト市（現在のブッパータル市）で始まった救貧制度をさす。市域を方面区に区分し、各区に救貧委員 (Armenpfleger) を置き貧困状態の調査および救済活動を行った。市長、市会議員、市民代表から構成される中央委員会が設置され、全市の組織として運営された。個別の委員はボランティアとして人格や経験を尊重されたという（山口、1984）。一方で特筆すべきなのは制度自体の運営には市の予算があてがわれたこと、さらに現在でも機能を果たしている制度であるという



ことであろう(小野, 1993)。エルバーフェルトシステムは日本における社会事業にも大きな影響を与え、1917(大正7)年には岡山県の齊世顧問制度、翌年には東京府慈善協会による救済委員制度および大阪府の方面委員制度等のモデルとなり、1920年代末には方面委員制度として全国的に波及した。第二次大戦後、民生委員制度として現在まで運営されている。

#### 参考文献

- 小野修三 1993「研究余滴—エルバーフェルト制度」:『三田評論』949号 56頁, 慶應義塾。  
——— 1994『公私協働の発端』時潮社。  
山口 透 1989『増補社会福祉入門』高文堂出版社。